

ブルデューからヴェブレンへ

——ブルデュー文化資本概念のアポリアからの脱却——

小原一馬（京都大学）

ブルデューとヴェブレンの理論の類似性は、エルスターなどによって指摘されてきた(Elster 1983: 69)。これに対し、ブルデューは、次のような形でヴェブレンを批判し、自身の文化資本の概念と、ヴェブレンの顕示的閑暇ないし顕示的消費という概念との間の明確な差異を強調した。

ヴェブレンは、卓越の探求を卓越した行動と同一視しました。そして、エルスターは、私の考えがヴェブレンと同じだと誤解しています。ところが卓越の探求とは、卓越した行動と同一視しうるものであるどころか、かえって卓越した行動の否定なのです (Bourdieu 1987=1988: 23)。

ブルデューの目的論的説明を批判するエルスターも、このことは認め、その点において、ブルデューを高く評価している。

しかし、ヴェブレン自身のテキストに直接当たるなら、ブルデューの、ヴェブレンの理論との差異化の試みはあやしいものとして映りはじめる。たとえば、彼の主著『有閑階級の理論』第五章冒頭の次の箇所を見てみよう。

近代社会の多くの人民にとっては、肉体的快楽のために必要なもの以上の費消をおこなう直接の理由は、自分たちの目に見える消費が金がかかっているという点で、他のものを凌駕しようとする意識的な努力ではない。それはむしろ、消費する財貨の量や等級の点で、慣習的な対面の標準にかなった生活をしようとする願望である (Veblen 1899=1961: 101、強調引用者)

ここからも明らかなように、上流階級の「卓越した行動」が、主観的な意味での「卓越の探求」といった、個人の直接的な意図と無関係であることをヴェブレンは、当然のこととしている。

そもそも、ヴェブレンがこの著作の中でうちたてようとした一つの命題は、人々の行動を導く主観的な意図の、二次的な性格であった。そのことを最初に最も鮮烈な形で主張したのはフロイトであったが、主に心理的メカニズムによる説明を行ったフロイトに対し、ヴェブレンがとったのは、より社会的な説明であった。フロイトが基礎とした性愛的な欲求のかわりに、ヴェブレンが前掲書で人々に設定した基礎的な欲求は、他者から評価されたいということ、特に、他者に自分の社会的な権勢を認めさせたい、というものであった。これをヴェブレンはより簡単に「見栄」といつている。

しかし、我々の行動を主観的なかたちで、ダイレクトに導く意図が、性愛的なものであることがほとんどないのと同じように、それが直接「見栄」であることもあまりない。ヴェブレンはこのことを、主観的な価値の二次的な生成によって説明する。すなわち、「見栄」の欲求を満たす効果をもつ行為や所持品は、歴史的過程の中で、次第に人の意識の中での「見栄」との結びつきを失い、その行為や所持品それ自体が価値あるように感じられるようになる、というのである。彼はいう。

ギリシャ哲学者の時代から現在にいたるまで、ある程度の閑暇なり、人間生活の直接の日常目的に役立つような産業過程からのある程度の免除なりは、思慮あるものから、つねに、立派で、美しく、あるいは非難の余地のない人間生活の前提条件とみられていた。…閑暇なり、その他の富の証拠なりの、このような直接的で主観的な価値は、もちろん概して、二次的で、派生的なものである。それはひとつには、他人の尊敬をうるための手段としての閑暇の効用の反映であり、またひとつには心理的代入法の結果である (ibid.: 42、強調引用者)

このように、後にブルデューが強調することとなる、主観的な価値の社会的・歴史的形成という原理を、その半世紀以上も前に、ヴェブレンはここではっきりと打ち出している。ヴェブレンにとって、こうした有閑階級の文化は、人々が互いに自分の権勢を他者に表現するためのコミュニケーション媒体として、洗練と淘汰を経てきた、制度にはかならない。それは現実に力を持つ行為者が、その力を外に過不足なく表示し、証明だてることを可能とする表現体系であることを求められ、その必要性に答えたがゆえに選択された制度なのである。現代の経済学者は、人々のこのような観点からいって合理的な行為選択が、実際にこうした表現体系を現出させることを数理的に実証した。「このような観点」とは、自分の力をできるだけ大きなものとしてみせたいという行為者と、他者の力をできるだけ正確に見極めたいという行為者が存在し、彼らがそのうえで最適な行為を選ぶということである。

シグナル理論やスクリーニング理論の名で知られるこうした経済学理論は、当初から、スペンス (1973) によって、合理的個人による学歴レベルの選択というような、教育社会学の分野における

応用が行われてきた。こうした経済学の数理モデルとヴェブレンの有閑階級の理論は、その根底において共通の発想がある。

その共通の発想を、もしスペンスが分析した学歴という例で考えるなら、次のようになる。すなわち、人は自分の持っている能力を直接しめすことができないときでも、より大きな能力のものにとつては、相対的に小さな負担になるような作業をやってみせることによって、その能力を示すことができる、ということである。ハンディキャップ理論という別名もあるように、この理論に従えば、勉強することは行為者にとって、ハンディキャップを背負うことであるが、より大きい能力を持つものは、同じだけのハンディキャップ（すなわち一定レベルの学歴に達するための勉強）を背負った時にも、より小さい負担になる。ゆえに、人々がどれだけのハンディキャップを背負えるか、という競争を自由に行った時に、彼らは自然に、自分の能力に見合ったハンディキャップを選ぶ、ということになる。それによって、他の人は、誰がどれだけの能力を持っているか、その背負われたハンディキャップすなわち学歴から判断できる、というわけである。逆に労働市場におけるシグナルという観点からみれば、学歴というものは、たまたま労働市場ではかりたい能力と相関をもつような性格を持っていたがゆえに、選択された表現体系であった、ということになる。

ヴェブレンが『有閑階級の理論』で考えたことも同様のロジックによって成り立っている。すなわち、人々のもつ社会的な権勢は財産によって直接、表現され、そしてその財産は、消費や閑暇によって間接的に表示される、ということである。ヴェブレンはその理由まではっきりと説明しているわけではないが、財産が、消費や閑暇（すなわち財と時間の浪費）によって表示されるのも、上と同様に考えられる。すなわち、消費や閑暇は基本的に、無駄なものであるのだが、より多くの財産を持つものにとっては、その無駄としてのハンディキャップの負担が相対的に小さくなるので、より多くの財産を持つものは、より多くの浪費を行うことによって、その財産を証明できる、というわけである。

そして、興味深いことに、ヴェブレンが財産の証明方法として考えた、財や時間の消費形態には、ブルデューが文化資本と考えたものがほぼすっぽりと含まれている。例えば、ヴェブレンは顕示的な閑暇について次のような描写を行っている。

閑暇は多くの場合物質的な生産物を残さない。それゆえに、閑暇の過去の業績の基準は、普通の場合、「非物

質的」財貨の形をとる。そのような過去の閑暇の非物質的な証拠は、半ば学問的な、もしくは半ば芸術的な功績であり、また直接、人間生活の促進に導くとは限らないような過程や事象についての知識である。…（同様に）洗練された趣味、作法、および生活習慣（もまた、）上流家族の絶好の証拠である。なんとなれば、よい娯楽というものは、時間、熱心、費用などが必要であり、したがって時間なり精力なりが、仕事で手いっぱいになっているものは、それを立派に身につけることができないからである。（Ibid.: 49-52、強調引用者）

このようにヴェブレンは、ブルデューの文化資本という概念の半面について、ほぼ同じような発想をしている。すなわち、文化資本が経済資本の転換物であり、そうであるがゆえに、それは、社会的地位の表現に役立てられる、という考え方である。このことをブルデューは「ディスタンクシオン」のなかで、「必要性からの距離」という概念をキータームとして次のように表現している。

（文化資本を特徴づける）美的性向とは、日常的な差し迫った必要を和らげ、実際の目的を括弧に入れる全般化した能力であり、…それゆえ差し迫った必要から解放された世界経験の中でしか…形成されえないものである（Bourdieu 1979=1990 (I):85)

しかし、類似点はここまでであり、それがゆえに、ヴェブレンは結局、文化資本というような概念を用いなかった。すなわち、ヴェブレンは、ブルデューとは異なり、このような「洗練された趣味」などは、あくまで、ある人の財産を表現するに止まり、それが財産を獲得するのに役立つ、とは考えなかったのである。シグナル理論を知っている我々には、ヴェブレンのこのような考え方は、実にもっともである。「洗練された趣味」は、それ自体無駄であるがゆえに、財産を証明するのに役立つのである。もし、例えば「正しい綴り」を知っていることが、直接、財産獲得に役立つのなら、それは、定義からいって、顕示的閑暇や顕示的消費からはずれることになる。その「正しい綴り」を獲得するにかかった費用をそこから十分回収できるのなら、それは浪費にならず、したがって、ブルデューのいう「必要性からの距離」を表現することもできないはずだということになる。しかるに、ブルデューはこうした狭い意味での文化資本、つまりベッカーのいう人的資本にあたるようなものと、財の表現としての機能を持った、純粋な意味での浪費とを混同し、そこから、彼の言う「錬金術」を引き出そうとしている。このような理論の方向性は、ブルデュー自身が主張する、ハビトゥスの合理性という概念とも抵触しており、容認しがたい。当日の発表ではこうした点を中心に更に詳しく述べていく。